

奇祭・鍋冠祭

筑摩御厨遺跡

「御厨^{みくりや}」とは、古代から中世にかけて、朝廷や有力社寺へ食物を調達する機関や場所をいいます。近江では勢多^{せ た}(瀬田)、和邇^{わ に}、筑摩^{ちく ま}に置られました。筑摩御厨の最も古い文献は延暦19年(800)5月15日付け太政官符で(『類聚三代格』)、宮内省大膳職^{るいじゅうさん だい せん しょく}から内膳司^{く ないしょうだい ぜん しき}に移管されたことが書かれていますが、その成立は奈良時代までさかのぼるようです。御厨推定地近くの湖岸の発掘調査では、小規模ながら墨書土器^{ぼくしょ ど き}がたくさん出土し、刀子^{とうす}(ナイフ、字を書く木の札を削る文具)、硯^{すずり}、緑釉陶器^{りょくゆう とう き}、皇朝十二銭のひとつ「神功開宝^{じん ぐう かい ほう}」など、8世紀末～9世紀(平安時代初期)の役所で使うような遺物が見つかり、筑摩御厨のものと判断されました。

—近江なる 筑摩のまつり とくせなむ つれなき人の 鍋のかず見む—

『伊勢物語』に詠まれた筑摩の祭は、平安貴族にも広く知られていました。鍋釜祭^{なべ かままつり}ともいわれ、筑摩神社の春の祭礼として、毎年5月3日におこなわれます。鍋冠^{なべ かん}りは7～8才の少女8人^{いっ}が一閑張りの鍋や釜を冠^{かん}り、緑の狩衣^{かりぎぬ}に緋の袴^{ひ はかま}をつけた雅やかな姿で、湖北に春をつげます。筑摩神社の祭神に朝廷の大膳職^{だい せん しょく}が祀る御食津神^{み け つ がみ}があり、筑摩の神は食物の神です。鍋冠祭は、御厨のようすを映しだした姿といわれます。



鍋冠祭古写真

特産品「筑摩鍋」

御厨の中心である筑摩神社の祭礼は、土で作られた鍋を供える鍋釜祭として平安貴族に知られていました。平安末期に成立したとされる『堤中納言物語』には、能登鼎・讃岐釜・大和鍋・河内鍋などとともに「筑摩の祭に重ねる近江鍋」が、地方の特産7品のひとつにあげられています。近江鍋は「筑摩鍋」ともよばれました。



太鼓山



母袋



祭礼行列図
(『筑摩字史』より)



筑摩神社



雁股鉾・刀子



墨書土器「月足」



神功開宝



鍋冠祭



筑摩御厨遺跡

■所在地 滋賀県米原市朝妻筑摩

■アクセス JR東海道線米原駅下車。徒歩約45分。
米原市役所米原庁舎にレンタサイクル有り。

米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1206番地 TEL.0749-55-8106

平成21年度 埋蔵文化財活用事業